



籠史國字解

田

三

79
3868
3



奥向の事をいふ嬪御とハ嬪ハ仕女あり御ハ君に給仕するの義あり
 嬪御とて官女の事をあり。閨房とハ閨ハ祿やの事をあり。嬪ハつねに
 都座の事をあり。閨房とハ尋常のねやの事をあり。妾媵とハ妾も媵も
 めうけの事をあり。是ハ天子の中宮の皇后に嬪御の官女の侍て居る
 めきまの諸侯の閨房の王のうちに夫人に妾媵のめうけ女の有る
 めきま猶花子も主人と好の使令がわるとあり。支山花子亦妖艶
 宮多事相惹雨亦自便嬖意可少哉とハ支山花子亦ハ山の
 花子亦あり此亦の字ハ字も亦も通る文字にて都座の字亦と
 去事あり妖艶とハ妖ハこひるといふ字艶うるべきと去字マて妖艶ハ
 めくといふ事亦烟とハ烟ハひかり明うといふ事亦ハハおれもておそ
 と去事あり惹雨とハ雨を帯て引るといふ事亦自便嬖とハ使嬖
 ハ美女の媚態といふ可憐らといふ事亦可少哉是去意ハ支
 山の花子亦法の字亦字多一妖とるものあり艶もものわりて
 いちめきこちて烟うらうら子弄おそふ様もあり雨と惹ひきて
 るハ一きわりて色々様々の態ありとあり亦自美女の媚態
 羨しく可愛き様を少くへけん哉主人も好も使令もかけ
 れハあつぬものありといふことあり

梅花以迎春瑞香山
 茶為婢海棠以嬖婆
 林禽丁香為婢牡丹
 以玫瑰薔薇木香為
 婢芍藥以嬰粟蜀葵
 為婢石榴以紫薇大
 紅千葉木槿為婢蓮
 花以山礬玉簪為婢
 木樨以芙蓉為婢菊
 以秋海棠為婢蠟梅
 以水仙為婢諸婢姿
 態各盛一時

梅花以迎春瑞香山茶為婢海
 棠以嬖婆林禽丁香為婢牡丹
 以玫瑰薔薇木香為婢芍藥以
 嬰粟蜀葵為婢石榴以紫薇大
 紅千葉木槿為婢蓮花以山礬
 玉簪為婢木樨以芙蓉為婢菊
 以秋海棠為婢蠟梅以水仙為
 婢諸婢姿態各盛一時

迎喜瑞香山茶の類といふ好と為とあり迎春ハおふわいあり瑞多ハ
 沈丁多かり山茶ハつむきあり是つむきの本字あり椿ハ俗通の誤あり

○海棠以頻婆林禽丁多為好とハ頻婆林禽ハ赤華を喜解す
 丁多ハ丁子の木なり是ハ日本子なきものなり○牡丹以玫瑰蓋
 本多為好とハ玫瑰ハたまをすといふものなり蓋蓋ハいそらと云
 赤華は悉く記す○芍薬以嬰粟蜀葵為好とハ嬰粟ハ芥子
 の花蜀葵ハわびとをわびの事なり○石榴以紫葩大紅子葉
 本槿為好とハ紫葩ハさるすべりの花なり百日紅とも云り大紅子
 葉の本槿ハ本槿と云くげの花なり大紅ハ色の濃赤事子葉ハ
 八重の事なり是ハ緋の八重の本槿の花の事なり石榴ハさく
 ろの花あり○蓮花以山藝為好とハ山藝ハとち云ハと云
 ものあり山藝ハきなり○本槿以芙蓉為好とハ本槿も
 芙蓉も和漢通名なり悉く赤華子徳す○蜀山秋海棠為好
 とハ是も二種とも和漢通名なり悉く赤華子解す○蠟梅ハ水
 仙為好とハ是も和漢同名なり赤華子徳す○法好姿態各盛
 一時とハ法好姿態ハ法ハもろくと續字蝶ハ腰元女なり如斯
 法の花子は口にくの婢と云るべき花を書つたぬこれともまじ
 てハか一天地の間字本一切法の花は好と云るべき花いくらも
 是と諸好と云り姿態とハ姿ハさうと云字態ハさちあり

と云事各盛一時とハ其法字本婢とも云るべきもの主人とも云るべき
 花皆色々の姿態換々の質姿をいへる花とも各一時盛なるも
 のあり梅の婢ハ山茶沈丁花おどいの雛菊ハ秋海棠等是其
 時一同盛なるものあり花子主人と使令と云りて徳て花とは美人
 の吾意を正して其道理と示すものなり○按今本朝の神花の
 風と看る本の花と挿てハ根締といひて字花と會釋或ハ梅花子
 葉なきとハ明蝶の葉等法て挿あり是等ハ其依中て取る子
 是らすおれども本の花より字本と高くせず想ハ二重朝の器
 上の口字花と挿て下の口字本花と挿る事と嫌を延程なり然
 ち傳ありて下字本花と挿上字花と挿る事嶺子生る字谷底
 あり生昇る本の風情是亦句点の一作其延理わる事ありされ
 とも是ハ斷断伝ある事とて悉ハ挿花園會は沈ぬ
 ○今茲ハ所ハ字本の性質の口と分別のものなり譬ハ梅と山茶ハ
 大きさも相違ておらぬ本花おれども其性質の口と梅ハ花
 ありて山茶ハ巨个あり使令の好あり又紫葩ハ大本もおれども
 石榴とて玉玉と一紫葩と使令とす芍薬と蜀葵ハ蜀葵の方

夫きく高く立昇ものかれども芍薬と君花とて百姿と嬋とす
是其花品骨柄の美こそを斯ハ位階とてくものあり能く
心浮べき事あり是亦嶺と谷との論とハ頗違事ありさればこそ
主君とてきき梅と使令の山茶とハ席と因せず瓶と因せず依
凡の上主君の居間上段とも去べき高瓶番子梅と挿てハ婢の居
所ハ平坐の一間を隔て依き瓶番子山茶と挿る事これ二瓶番
て一及びの花とするなり是れ瓶史の趣意子て挿花の道の深き
ものありて他子あくる所あり尚前子去根締の旨趣或ハ二重切
の首類とハ大子美事あり一旦子論ずううは悉くハ挿花園子
述くるなり今層子擧ぐる花をりり限るべうす徳本決草悉く
此道理ももくこそあり能く穿鑿して櫻子瓶を因すべうす

濃淡雅俗亦有品評
水仙神骨清絶織女
之梁玉清也山茶鮮
妍瑞香芬烈玫瑰嬌

濃淡雅俗亦有品評水仙神骨
清絶織女之梁玉清也山茶鮮
妍瑞香芬烈玫瑰嬌芙蓉明

葩芙蓉明艷石氏之
翔風羊家淨琬也林
禽頗婆姿媚可人潘
生之解愁也嬰粟蜀
葵妍於籬落司空圖
之鸞臺也山礬潔而
逸有林下氣魚玄機
之綠翹也丁香瘦玉
簪寒秋海棠嬌然有
酸態鄭康成崔秀才
之侍兒也

艷石氏之翔風羊家淨琬也林
禽頗婆姿媚可人潘生之解愁
也嬰粟蜀葵妍於籬落司空圖
之鸞臺也山礬潔而逸有林下
氣魚玄機之綠翹也丁香瘦玉
簪寒秋海棠嬌然有酸態鄭康
成崔秀才之侍兒也

やびやうなりといふ事 然ハ凡俗とていふ事 是ハ前子去婢使令子
亦其字本品とのもの子色との評判ありといふ事 是ハ前子去婢使令子
あるべき花ごも品この出生子濃子あつきの冷くうすきとの雅くまびやう

あるもの凡俗のいやきもの其性質のままれつき品となり亦是と古の
美女子譽て評判ありと云あり其評子曰

○水仙神骨清絶 織女之梁玉清也と八神骨と八神はとほひ骨不
ねあり水仙の骨とまゝいと云事あり清絶ハ清ハすこきさうらふること

絶ハすれらるる清子澄絶て勝るの義あり成程水仙の形状の如
ちこそあが能く察る其骨精の澄すれ清なるものあり蚊骨神

と厳く云あり因る織女之梁玉清子こそ一あり織女の梁玉清とハ
織女ハ星の各あり牽牛星と云星と天河とさうつて相會る二星の一あり

依子女七文といふ是あり梁玉清ハ其織女の侍女あり侍女ハ即婢の事也
明胡元瑞云玉童遊覽子織女星侍女七人梁玉清と號す ○山茶鮮妍瑞多芳烈玫瑰嬌蕊
石氏の朔風羊家淨院也とハ山茶ハつときあり鮮妍ハおどろましいさか

ふくろるハ一く疑ハせ美と云事あり瑞多ハ沈下花あり芳烈ハま
まげきものこと云事あり玫瑰ハもまますと云ものあり持蕊とハとち

あやめくものこと云事あり紫芳和漢通名あり明艶と云ハさき
さめくものこと云事あり紫の如くまことの出生の性質わりて皆美女子譽て

いふあり石氏の朔風とハ石氏ハ晋の石崇と云一人あり朔風ハ美女子譽
崇と云事あり羊家の淨院とハ羊家ハ晋の羊曇といふ者淨院と云

是七方ぬ美女あり○林禽頻婆娑娑媚可又潘生之解愁也とハ林
禽ハ人ごかり頻婆ハ紅林胡あり娑媚ハすさの媚をまめくものと云

事可又とハ人子可といふことあり依人ハさよめこといふ是かり人愛相
の能意 潘生之解愁也とハ潘生ハ齊東昏後の愛妃潘金蓮

と云一美女あり解愁ハ潘金蓮が使令の侍女あり○嬰粟蜀葵
所於離落 司空畫之齋也嬰粟ハ芥子花あり蜀葵ハ花菱あり

妍於離落とハ花ハまきかり離の陰と云芥子花菱葵等すさ
と云も顔とせ乃よそ一應一く離と云る有様と云ふあり司空畫之齋

也とハ司空圖ハ晚唐の入りて齋畫ハ別愛妃あり晚唐とハ唐
の代の末とありこの時といふあり○山禁隱而逸有井下氣魚玄機

之縁翹ありとハ隱と云くハ潔白のことあり淨く潔き事あり逸とハ
隠逸と云山中一隠て去を遁て居る又の趣意あり有井下氣とハ隱

者の意持と云山林等一引籠て欲氣もかく潔なる人達の趣也
山禁ハふいふ又と云ハはと云ものあり是ハ山禁の出生性質の淨く

隠く隱者の氣もちの有所と云あり魚玄機之縁翹也とハ魚玄
機ハ唐の女道士あり道士とハ此邦の修験者の類あり縁翹ハ魚
玄機が身子の女を子あり傳曰魚玄機容貌逸又美麗也云而

道人也工詩然亦負女也綠翹工詩好風韻云云これ女ありて詩を
 録上より紙り風韻と好ハ徳者の旨趣と好ハあり山装の出生
 狂貨云くは緑翹の翹子應つりとあり○了多瘦云管管寒秋海棠
 嬌然有酸態鄭康成崔嘉方之侍兒也とハ了多ハ了子亦あり日
 本子ハあきもの也其翹と解す瘦るとハ亦ハ肥て太りたりとも其翹
 のかびて思ゆるものかき一今此邦までもよくてげおむの等ハ疲
 くる翹かびて思ゆるあり玉簪ハきりりりり寒きハ花ハ夏開とも
 其翹何とやと云んて寒き翹色あるものあり秋海棠ハ和漢通名
 あり嬌とハ媚をまめく姿態あり成程秋海棠の形状あり然有
 酸態とハ是ハ酸をさぐるものを去事なり成程此云品こそ然る姿ハ
 さかまらうは鄭康成ハ後漢の大儒鄭玄が事也崔嘉方ハ是も後
 漢の崔邈とハ一入あり嘉方とハ學者の幼年の才智の多盛ると
 稱する詩なり侍兒とハ其入達の腰元の使令の事なり
 是ハ了多亦の出生狂貨の態を淨別と云右の名ある美女の笑く
 の兼質狂葉子警へりりり是も了多亦の了多亦の章字亦
 の出生と云入子とて云くは是も了多亦の了多亦の章字亦
 笑くの狂貨の姿態あり挿花と教人此情と狂案亦ハ有へるは

出生と知ると云事ハ即ハ事なり善此有翹と稱するハ挿花の真意
 教の齊とて満元と云花と挿る事ハ有るへるす用る是と挿花の技
 藝の肝要有一とす逆も未熟の輩の速へる事なり

迎春 和名 黄雀兒 通名 金腰帶 郡芳譜 腰金帶 花鏡

邊生八腕四時花記曰春首開花名每於花放時移裁去肥則
 茂る二月中旬分種ハ 按日本今人家庭際ハ多栽小亦あり
 技多亦ハ新緑色物多黄花と開二月頃葉と生ず花六瓣枝
 の葉子枝根ありてとり亦すて最活す

瑞香 和名 ちんていけ 一名 麝囊 花鏡 紫丁香 草花譜 此外諸書多各各畧

廬山記曰復盤石上夢中開花名醜列 求海之名醜多附方
 奇又諸花中為祥瑞遂名瑞香云

邊生八腕四時花記曰瑞香四種有紫花名紫丁香有粉紅者
 名瑞香有白瑞香有綠葉黃蓮者名金蓮瑞香極紫花
 葉厚者多甚他如桂林有象蹄花似尾葉小柏那花
 葉用淡紅花白雀花花如雀上元花上元時開花似茶花清嘉素
 色俱名花 瑞香不可得云
 今日本入園は多あり修治てりんとけと唱冬夏の開枝の赤葉の

上子花巾り十輪斗取て再四辨ひて筒葉花の内白く外紫多
 葉わるともつて和仍沈了花と呼これハ葉と結す又一種白花
 葉長大なる者巾り和州の深山子多あり是ハ葉と結南天燭の
 葉子似て生ハ青く熟る時ハ紅く葉辛一國仍胡柿の本ありといふ
 大子漢あり子必毒あり善治て今ハ半日針燭同す所謂白燭
 葉是なり胡柿ハ蔓又生じて日本ハ未なきものあり葉燭葉あり
 花鏡子一名名結去一本の高き丈針本も三腰枝も悉く三腰あり
 花葉時を同せず冬ハ葉赤く初冬より花と成りて枝の葉は房
 の如く千糸々々蜂の葉の形に似たり葉子玉て團滿外は内黄色
 花終て新葉と生す柳の葉或ハ夾竹桃の葉の如く長六あり
 秋子玉て葉落て己子落蕾指子存す枝柔かく結ても折す故に
 結葉と去葉を今依り三腰といふは是なりちんてうげの種あり
 ○山茶 和名はまき 一名曼陀羅花 花鏡 鶴丹 葉花小緑曰胡柿 冬葉花赤葉
 遵生八牋四時花紀曰山茶花如磬口外有粉紅者十月花再
 二月亦已有三鶴頂茶如碗大紅如羊血中心塞滿如雀頂葉
 自雲南名曰滇茶有葉紅白粉四色為心而大紅為盤名曰瑪
 瑙山茶花極可愛產自浙之溫郡有必安珠九月發花其葉清

可與別名甚多以可與玩世所廣者錄之
 釋名 時珍曰其葉數若又可作飲及得茶名之
 集解 時珍曰山茶產南方樹生高者丈許葉頗似茶葉而
 厚硬有棲中開頭出面綠背深冬再花紅瓣黃葉赤
 格古論云花有數種寶珠者花葉如珠最勝者海欄茶花
 帶青石欄茶中有碎花鄭濁茶花如杜鵑花宮粉茶花
 珠茶以粉紅色又有二種紅子葉紅子葉白等名不可勝數
 葉各小葉或云又有黃色者虞衡志云廣中有南山茶花
 大倍洋州者色淡綠葉薄有毛結實如梨大如拳中有數
 種如肥皂子大者
 ○山茶品類甚多秘傳花鏡史左編郡芳譜等子詳之既あり
 集解 寶珠茶ハ和名いせつなき又とまてたことハ子葉ありて正中
 葉す葉と露さす海欄茶ハ花のちいさきものあり和名いすけなき
 といふ名欄茶ハ外の辨葉のつなきの如く肉子細辨葩あり子葉の
 嬰粟花のこく鄭濁茶ハ單辨の葉つなきなり宮粉茶津珠茶
 二名因物あり今謂てんつなき等の数あり一葉紅ハ和名わが
 あといふつなきなり子葉白ハ名の子葉つなきなり即和仍とまつなき

較蕃蔽原大而瓣寒心有大红粉色二種出

○金沙羅 和名 うらんこいむら

似蕃蔽而花單瓣色更紅艶奪目

○黃蕃蔽 和名 きいむら

色密花大亦青種也剪枝杆種近廣於昔態嬌韻雅

蕃蔽之上口也云々

○木多 和漢通名

遵生八牋四時花記曰木多花三種花開四月木多之種有三其

最紫心白花多腹清潤有紫萬條望也多雪其青心白木多

黃木多二種心不及也亦以剪條挿種不甚多活以條挿入土中

一段壅泥個月餘根長自本生枝外剪移栽可活云々

○釋名因呼馬兜鈴根為青木多云々これ因名あると云乃呼

馬兜鈴根為上木多と集解に見たり古方中曰青木多南本

多云是即上木多也后世方書及方中云青木多とあるハこの

馬兜鈴根と指云也

○和木多ハ云木多也此木多と稱するものハ真ハ大車と云このかり

これハ旋覆花と和名小車と云云對てらくいゆりと云もの小車云

似て大なる故に大車と名くこれと種村家まで大木多といふ中

華まで日蓮客と云者也本邦京都多ありといふ又山崎國富

野邊及丹後國細野邊にこれを栽となり和産中丹後の者

上品とす山崎の者と下品とするかり葉の幅五寸計長二尺

計天名精の如く素より皺あり短色あり黄色と帯る久ハ

葉枯て萎舊根より最生す夏申心より莖と抽て七尺計葉

互生す秋莖段に花を再これ旋覆花に似て大く軸は直子

並て着大さ一尺餘葉花黄心より單葉葡萄花の如く此根

和木多といふ集解に載と云の云木多是なり根長一尺半

葉の如く味辛多氣あれども乾すときハ赤と云く子氣あり

○又呼種蕃蔽為木多是ハ木多花也花鏡にも出たり

ふかれまされいさらといふものかりと蕃蔽に似て刺あり五葉ハ

重花と開く櫻花の形のごとくこれハ是木多花といふ者

あり遵生八牋に云所の木多花ハ此上品なるものかり前

注する者ハ藥種の本多也按今此種は子云所の本多ハ

藥種の本多ハ非す即此木多花の事なりされども今

和依本多花といふ者ハ形状少し異り

○嬰粟 和名 けいしのえき

遵生八牋四時花紀曰嬰粟三種嬰粟小瓣五色虞英大瓣紅而增滿國春秋辨飛動俱以子種在八月中秋日下宜大肥則明年夏月花茂否不及矣

○又一種麗春花 和名 びんじんそく 嬰粟之類也其花單瓣瓣常子飛舞儼如蝶翅扇動亦子花中之妙口也

○蜀葵 和名 我葵 一名 一文紅 郡芳譜 蜀葵紅白紫單葉千葉あり葩の細あり

圓あり鏡口と葩の縁のわくきれなるもあり剪絨と細ききれたるもあり皆俱子花鏡子見たり

遵生八牋四時花紀曰蜀葵出自西蜀其種類似不可曉地肥善

灌花有五六十種奇態而色有紅紫白墨紫深淺桃紅茄紫雅色相間花形有子瓣有五心有重者有剪絨有細瓣

有鏡口有函瓣有五瓣有重瓣一種莫可名也但收子以多為貴八九月間鋤地下之玉春初刪其細小苗雜者別種餘

畱本地不可缺肥五月繁花莫過於此云又一種錦荔枝和名錢葵花葉如葵稍矮而叢生花大如淺

止有粉間深江一色再亦耐之云

集解葉似葵葉全粉相心一種小者曰錦葵是即此錢葵也

中華子銀葵と去者葉蜀葵より小く茎短同時子花と再錢大さの如し淡紅色より紫の縫又あり又白花あり花鏡子見ゆ

○紫薇 和名 ささすり 百日紅 遵生八牋四時花紀曰紫色之外有大紅色此種亦可也

○大紅子葉木槿 和名 木槿の音轉あり 赤さか不 古訓萬葉集 一名 瘡子

花 郡芳譜 愛老 同上 潘尼 四字通 麗木 事物補遺 胡茵 通雅

本草綱目釋名 椴櫨 薺 日及 綱目 朝再暮落花 同上 蕩蕩子

網目 花奴玉蕊 時珍曰此花朝再暮落故名日及槿曰舜猶

僅榮一瞬之義也爾雅曰椴木槿木槿郭璞注云別子二名也或曰公曰椴木曰椴齊魯理之去葵言其美而多也詩曰

如舜華即此也 集解宗真曰木槿花如小葵淡紅色五葉成一花朝再暮欽南

北人家多種植為庭障花與枝兩用 時珍曰槿小本也可種可挿其本如李其葉末尖而多極齒

其花小而艷或白或粉紅有單葉子葉者五月始開收遠書
月令曰仲夏之月木槿榮是也結實輕虛大如指頭秋深自
裂種之易生也

遵生八牋四時花記曰槿花三種雜種花之最急者也其種外有
子瓣白槿大如勃林有大紅粉紅子瓣遠望可觀即南海
種那提槿也且揮種甚易也

本邦多者有七の方り品類多し淡紫碧色の者通例也又白花單
瓣子瓣あり粉紅色あり底紅あり大紅あり是等皆上口なり
品類多しとも悉く一物あり

又那提槿と云ハ枝葉花なり按桑花も本槿の種類なり琉
球むくけと云ハ通名佛桑花なり琉球方言ハ菩提花なり
一名照殿紅那提槿花草著和産ハ今琉球より來る者
多し薩州ハ甚多し是形狀少し別されども本槿の種類
なり氣極上品可貴挿花佳也

小紫 和名 とちーバ 一名 梅車 九里多 物理小識
與栗栗同名也 函客 共兼便覽 興蘭同名也
小白花 郡芳譜 海桐花 郡芳譜 同名也

本草綱目釋名 芸 音云 花 音云 松花 音云 槿花 音云 槿花
俗七里多 時珍曰芸盛多也老子曰方物芸之也此物
山野叢生甚多而花繁多綴成名按周必大云松音陳出
南史荆俗訛私為那呼為那製而江南又訛為場也
黃庭堅云江南野中花極多野人采葉燒灰以澆紫
為黝不借製而成予因以易其名為山紫

集解時珍曰山紫生江淮湖蜀野中樹若大者株高丈計
其葉似苞子葉生不對節光澤堅強畧有齒凌冬不
凋三月開花葉白如雪六出黃葉甚多結子大如椒青黑
色熟則黃色可食其葉味澁入取以滌黃及以豆腐或雜入若
中一被洗枯華淡云古人藏書辟蟲用芸葉謂之芸草即
今之七里多也葉類豌豆作小葉生發臭之極芬香秋
間葉上微白如粉汚辟蟲殊驗又按蒼頡解詁云芸多似邪
蒿可食辟紙蠹許慎流文云芸似苜蓿成公綏芸賦云芸
秋竹枝象青松郭義恭廣志有芸多膠杜陽編云芸
多子也出于圓圃其多潔白如雪入云不朽元載在芸暉堂
以此為屑澆壁也據此數說則芸多非一種沈氏指為七里

多子也出于圓圃其多潔白如雪入云不朽元載在芸暉堂
以此為屑澆壁也據此數說則芸多非一種沈氏指為七里

多者不知何據所云葉狀宛豆殼臭者多秋間有移者亦
與今之七里多不相類狀頗似烏藥葉恐沈氏亦自臆度爾
魚目端伯以七里多為玉蕊花葉未知的確否

遵生八牋四時花記曰山禁花生抗之西山三月着花細小而繁
多醜甚遠及仍名七里多云

此山禁古本草諸說多一 大和本草云瑞香之事不出中華
てハ山禁の煎汁ヲ黄色と深紫石と借すして深紫山禁と

名しといふ今此邦云々むすめーと云者と迎東山禁は充これ誤なり

此むすめーハ一名むすめー又むすめーともいふ海邊に生一大木と云る

者嫩葉と揉濃煎其汁と鉄漿水入て五倍子子代用ゆ及む

そのの名ありとこれと山禁は充ハわきまりと云るを山禁は充ハ

むすめーと云るを又云々もいふこれハ大本云あるものにて葉ハひさき

似て光澤ありて鋸齒ありて互生す冬と凌ぎて凋す此樹

將は枯んとするときは葉色變じて深紫色なりと云り又九州

通ハ此葉を用て膏を製すこれと云々次々と云り此即

山禁あり集解の説甚粗也唐の昌親玉蕊花記及名山勝

際記等の書は詳し見たり然とも此瓶史中子所言之山禁

今注する所の者ハ其形状意態頗異り此諸説子據りて按

て山禁と稱する者數種あるおもむきなり安蓮花と玉蕊と

して山禁玉蕊と似て婢使令とす花一時は盛なりと云

山禁葉より逸子林下之氣あるハ玉蕊之綠翹なりと有

今注は説と云ふ山禁ハ葉の末子花とありこれ其形状時節

と違り按るに今此邦云々瓶史云々云々の山禁其葉質薄

て逸子林下の葉あるものは較する者ハ辛夷花科の花等の意

態ふれどもこれと葉の末より初夏は濟て花さくものあり蓮花と

一時は盛なりとあるハ尚ず右此情質は似る者も蓮と同時

に花さき蓮花の使令婢女ともいふべきものハ山抱子花の類あり

與否は又玉蕊ハさかきりあり今此邦云々云々云々云々云々

葉の末より夏の初はさきりて花さくものあり可怪此末は注し

るもくさきかきり又さんかきり等と云者季夏より初秋はさきりて

花さく即蓮花と同時盛なるものあり惟山禁の末詳ならず

○玉蕊日 和名 さかきり

遵生八牋四時花記曰玉蕊花二種葉初移種肥土中則茂

其花辦拖靛入少糖霜煎食其清味冷可入清供紫者

花小葉上黃綠間道喜水公種益在裁之可玩也
 按今出きわうハ葉色深緑而帶玉粉葉白強厚而有皺
 花莖短有喜赤花葉小也此きわうハ又同姓乎一
 わり葉花共子長廣大者者なり依呼でるいとい有
 種深山草中多生者葉薄而色淺花尖葉也
 花白く香夏より初秋に玉此と云きわうハ又有一
 葉小長く尖色薄緑子清白の斑付あり依いさとい
 細くハ葉子花紫莖抽て長此と和依ふんてとい又
 一種花葉共玉玉て長大く葉の色淡花白夏より秋に
 これと依いさといさとい玉の如きとい此等五種外
 ち種數あれとも皆共漢名玉簪の種數なり今此瓶史中
 此巧の蓮花の婢とすすものハ此と云きわうハといさ
 種とさていふなるべし

菱莖

和漢通名也但是ハ本菱莖也

本草綱目本菱莖

校正傳入國種地菱莖

釋名地菱莖

綱目本蓮

華本

同工批本音化拒霜

時珍曰此花豔如荷花及有菱莖本蓮之名八九月花始開

及名拒霜俗呼為批皮樹相如燈子碧之華本注云皮可為藥

也蘇東坡詩云與作拒霜於味務看素却是氣宜霜蘇

頌圖經本草有地菱莖云出揚州九月採葉治瘡腫若血即

此物也

集解時珍曰本菱莖處有之種條即生小本也其餘叢

生如荆高者丈許其葉大如桐有五尖及七尖者冬凋夏茂

秋年始着花冬熟牡丹芍藥有紅者白者黃者子葉者

最耐寒而不落不結實山又取其皮為索川廣有漆色拒

霜花物每冬色次日猶紅又明日則深紅是後相間如數色

霜時來花相後葉葉陰乾入藥云

遵生八牋四時花記曰菱莖有數種惟大紅小紅白小紅半

白半紅小紅辨菱莖莖莖胡白午桃紅晚改大紅者佳甚不

必分根記在十一月中将嫩條剪下砍作一尺一條向陽

地上強抗埋之仍以土掩至正月後起條遍挿水邊林下

菱莖活者為莖即花云

菱莖よりハ蓮花の事あり此蓮花似ハ本物あり故ハ本菱莖
 の名あり今世ハ菱莖のあり葉如桐の葉七尖五尖或九尖鑑

葉より秋花を開く本種花より大なり紅白單瓣子瓣の數
種あり又一種一葉子七花叢りて再く者あり倍子七面葉若
と不冷紅色甚鋭て英あり最奇品なり近來所く多し
集解は漆色拒霜日と隔て色と倍事を去ハ誤なり物理小
識子曰粵西漆色芙蓉花朝一再正白午後微紅夜深紅
也とこれ一日中子色の倍ものあり

○秋海棠

和漢通名

遵生八牋四時花記曰秋海棠嬌冶柔歎美因美人佳粧
此品素陰一見日色即瘳九月收枝上黑子撒於盆内
地上明月多發枝節年有花老招過冬者其莖更茂也

○水仙

和漢通名

遵生八牋四時花記曰水仙二種有單瓣者名水仙子瓣者
名玉玲瓏又以單瓣者名金盞銀盞因花性好水故
名水仙單者葉終而老可愛用以盆種上几其法子云
五月不在去六月不在房栽向東籬下花再榮多五
月取起以入罽浸一月六月近窻所置之七月種則有花
甚不出也余曾為之無較且抗之近江水安菜戶成林

種者無枝不花味膏用此法也惟去近海鹹則花茂也
今日本より泉州よりある者花早八月頃より花再とり北國
より玉玲瓏と云て花よくとる單瓣の花銀の盞子金の盞
と云て玉玲瓏と云て又子瓣の花子綠色と帯若あり不英倍と云
とる者あり不實亦赤花あり越後國より産と去未見挿花
用者子瓣の類皆宜く以惟單瓣の者掲為上

不能一一比像要之皆
有名於世柔佞纖功
頤氣有餘何至出子
瞻榴花樂天春艸下裁

不能一一比像要之皆有名於
世柔佞纖功頤氣有餘何至出
子瞻榴花樂天春艸下裁

不能一一比像一と八前子と云て諸婢の花皆各品評の評判ありと
數多事おれバ一と子比像と云て多て連綿と云て能すめいさいハ出葉ぬ
とりふと云り○要之以有「名於世」とハ要之とハ其教く多き花
おれバ一と比像評判する事ハ必ず因る其中の肝要なる花と取

つまんで出てくるものと云事あり皆有名於世と其肝要なる花を
と取摘んで出て見るもの云事あり名のある花をともなりと云事
あり○柔佞纖功願氣有餘とハ柔ハやろろくよく佞ハこび
るらふの形纖ハ不そしちいさしと訓ず功ハとてましてゐるこしと譯
これハ總て字本の花の姿の柔く弱くと云佞ハさか有核都
其葩葉等の纖おいさく嫩ハ細みて其自然の造物の巧まらる
こしき所を云事あり固人の氣を願ふ餘有と云事あり
○何玉少子瞻榴花樂天妻柳下或ハ子瞻ハ宋の东坡
生の事あり榴花ハ东坡先生の妻の事あり樂天ハ晚唐の白
居易ガ事あり五俗子去白樂天のこをかり妻柳ハ則樂天
妻の事あり

此大意ハ字本の形於容顏生質と悉以美人美女ヲ譽つて
云事一評判すれども數多事取一此像連續ガ一攻其肝
要ある名花ともなり取摘んで意匠と云事ハ中ハ名と傳ふる
各花ともなり其生質の柔佞纖功して潤く美人の身と
隨ハ餘有りさすれば吾も花ともつて美人の心持する妻とさ
る氣もかりて樂ハ何東坡白樂天との風流の人意の榴花也

妻柳より云事の下ハ美人也その身はけりこもまりてこれより
乃美人ハハある中ハきざととりよとまり○あるはけりいや
美人も口相好むつきよ居てハ固もつきまのしとも失
て柔老くならるまでのきざとハゆづるハ然にこの榴花ハ
中もこの時よりゆるもよび何をも身よりハ移さきことと
きざとハけりもさすれてけ急あきありさほ老はすとの雲
美より美人も遊まきまきせりまあらん

十好事

嵇康之鍛也武子之馬也陸羽之茶也
顛之石也倪雲林之潔也皆以僻而寄其磊
塊傳逸之氣者也

十好事

嵇康之鍛也武子之馬也陸羽之
茶也顛之石也倪雲林之潔也
皆以僻而寄其磊塊傳逸之氣者
也

十好事といふはよき事とすきものむとらふとてものずきと

ふことあり。孟子の文字をすて人をもてを何してよきとす
俗乃ひんて。あまよきあり。依法も一依あり。人よりまろし
その元依の澤遠のことあり。御を。そのを要。き事。思。不。澤あり
移。く。入。る。者。ハ。思。き。事。カ。リ。そ。ま。し。せ。ぬ。昔。あり。惟。き。子
まろし。する。人。乃。事。あり。依。く。よ。き。事。ハ。何。ぞ。と。言。き。こと。我
し。も。人。乃。事。く。す。よ。き。も。の。通。理。あり。か。ゆ。小。服。ぞ。折。り。き
事。ハ。少。し。も。せ。ぬ。き。ま。の。ま。よ。き。事。ハ。小。少。の。る。も。眼。ぞ。ま。り
大。き。罪。あり。故。ま。よ。い。依。く。よ。き。事。乃。能。何。ぞ。と。一。色
澤。も。す。事。の。あ。ま。と。御。と。よ。て。好。事。乃。人。と。よ。ま。り。
○徳康之假也。と。密康ハ。音。の。口。人。と。竹。林。乃。七。賢。乃
一。人。あり。平生。非。法。と。好。く。せ。人。ハ。非。法。ハ。カ。ぞ。ま。い。ひ。り。い。ま
こと。多。り。非。法。何。し。非。法。と。好。ま。り。ま。り。
○武子之馬也。と。武子ハ。晋。の。王。武子。と。い。へ。人。老。小。馬。と。い。ふ
ミ。人。あり
○侍羽之茶也。と。唐。乃。世。の人。と。陸羽。字。鴻。漸。茶。乃。飲。る。と
を。製。し。始。し。元。祖。あり。茶。と。好。んで。茶。僧。と。慕。す。
○朱顔之石也。と。石。乃。朱。顔。の。朱。顔。ハ。石。乃。元。年。か。こと。多。り。平生
石。乃。好。し。重。穀。せ。人。あり。世。洗。も。良。あり

○伏雲城之際也。と。元。乃。伏。雲。林。ハ。事。也。名。湯。の。人。あり。生。り
唐。乃。人。あり。一。依。あり
皆。以。依。而。寄。其。名。則。德。遠。之。事。也。と。一。色。よ。き。事。を。得。ず。と。一。人。を。依
是。前。ハ。元。乃。何。ぞ。と。一。色。よ。き。事。を。得。ず。と。一。人。を。依
ある。人。と。よ。ま。り。人。と。よ。ま。り。事。ハ。本。邦。と。昔。舊。氣
俗。乃。依。も。事。一。色。よ。き。事。ハ。一。川。乃。依。と。多。り。村。々。五。士。茶。区。ハ。飲。り。て
其。道。力。非。と。成。る。事。是。依。は。依。事。乃。依。あり。と。あり。て。多。り。今。後
に。出。せ。俗。人。と。これ。何。ぞ。と。言。ひ。て。依。く。す。依。あり
○急湍とハ。急。ハ。形。ひ。あり。と。拍。す。堰。ハ。か。ほ。り。あり。つ。と。ん。と。云。ふ。事。也
急。ハ。事。象。乃。急。大。事。形。と。あ。り。佛。遠。と。ハ。二。字。も。に。勝。る。と。い。ふ。事。也
常。道。商。乃。人。より。ハ。立。て。事。ハ。真。大。子。す。ん。と。入。と。い。ふ。事。也
都。て。人。多。事。多。れ。ハ。一。道。道。を。さ。も。し。も。か。り。事。事。と。弁。て。一。色
と。執。行。す。れ。ハ。行。也。乃。元。祖。と。も。成。あり。事。事。名。其。事。遠。也。其。道
と。事。一。色。と。多。り。に。於。て。ハ。依。依。輕。あり。故。小。陸。羽。ハ。茶。好。んで。茶。僧
と。慕。し。今。の。世。も。其。天。祖。と。仰。げ。り。多。り。朱。顔。乃。名。を。朱。顔。と。慕。す。事。ハ。名。を
好。みて。其。依。四。方。に。馳。走。す。乃。世。子。で。も。人。と。重。し。御。所。を。慕。ふ

以とするあり是其好事也執心の深きなり
是總て凡俗の入道に侵り沈酔没するありてやくもなき難
茲泄言譚と一或ハ利欲理屈は日月日とおくり面顔可憎の
顔色容貌風俗穢劣さきて狂ひ燥ぐる皆不風雅の至
極ありこれを如何と云ハ其益益穢行する暇もつて好事
の藝術其外法事已る務べき事と意と止く性命の死生
をもりて勤執らせハ何等の六ヶ敷技もこれを得ずんハある
べからず何事の忠孝よりとも立ずといふ事あるべからず世の益
ある事も官名貴名との二事も成すと云ふ事あるべからず
月日と益益明暮す輩多し先陰流水も孝一瞬の間
あるべからず益益とちあひさるべけん哉

錢奴とハ利欲に耽り迷の輩といふ事也專錢もくけく無理に
金取と解る事のこと所作とする者といふあり室賈とハ室は官
の事公は仕る人と云賈ハ商といふ字也原商賈の事あり
之と室賈難字と云ハ何の能もなく功もなき人の也賈と以て
多理に陷いて昇室出世の俸祿と賈者といふあり即室を
賈子著しき故官賈人と云意あり一儔わんと其志所の技

古之負花癖者聞人談一異花
雖深谷峻嶺不憚蹶蹶而從之
至於濃寒盛暑皮膚皴鱗汗垢
如泥皆所不知

右之負花癖者聞人談一異花
雖深谷峻嶺不憚蹶蹶而從之
至於濃寒盛暑皮膚皴鱗汗垢
如泥皆所不知

一花將萼則移枕攜襪睡卧其下以觀花之由微至盛至落至於委地而後去
 一花將萼則移枕攜襪睡卧其下以觀花之由微至盛至落至於委地而後去
 一花將萼則移枕攜襪睡卧其下以觀花之由微至盛至落至於委地而後去

一花將萼則移枕攜襪睡卧其下以觀花之由微至盛至落至於委地而後去

一花將萼則移枕攜襪睡卧其下以觀花之由微至盛至落至於委地而後去

一花將萼則移枕攜襪睡卧其下以觀花之由微至盛至落至於委地而後去
 一花將萼則移枕攜襪睡卧其下以觀花之由微至盛至落至於委地而後去
 一花將萼則移枕攜襪睡卧其下以觀花之由微至盛至落至於委地而後去

花夢とするときは枕蓆等携行て其本の下は膝臥して
花初花の隙一尋くも時より地初初盛玉と看盡
花漸く花もうつろい落り後悉く果地を看盡
花を看盡と観て其後帰去る帰宅すると云事なり

或千株萬本以窮其
變或單枝數房以極
其趣或臭葉而知花
之大小或見根而見色
之紅白是之謂真愛
花是之謂真好事也

或千株萬本以窮其變或單枝
數房以極其趣或臭葉而知花
之大小或見根而見色之紅白是
之謂真愛花是之謂真好事也

或千株萬本以窮其變或單枝數房以極其趣或臭葉而知花之大小或見根而見色之紅白是之謂真愛花是之謂真好事也

根を思ひ色之紅白是之謂真愛花是之謂真好事也

若夫石公之養花聊以破閑居
其真好之已為桃花

若夫石公之養花聊以破閑居
其真好之已為桃花

洞口人矣尚復為人
間塵土之官哉

尚復為人間塵土之官哉

善交石公之養花聊以彼用居孤癖之
慈非真性好之也と石公と八表宏道中郎先生の別稱あり
閑居と八閑ハあづらあるいと事と出事と閑居と二字熟してハひま
みて静よく引籠て居ると出事なり彼孤癖之慈とハ孤ハひとり
と出事寂ハさびしきと割す閑居して孤癖して居ハ慈なり此癖
慈を挿花と彼て少ハ獨坐のゆきすると出事なり此去意ハ
善交石公中郎吾と花と表ハ聊以花の好事と云ハ非ずとて
閑居してひまを居る間の孤癖しき慈と彼のこゝろと出事なり
真は善交子慈これと好ハ非ずとこれ前ハ出入のこゝろハ深谷函
谿子修行社の好事の癖と云若ハあづらとあり是ハ表中郎先
生自界下の癖なり
○文使其真好之已為那花洞は入尚復為人間塵土之
室哉とハ那花洞は入とハ近ハ蒙求子見たり武陵の漁父
漁父ハ非種族のことあり那花の流れ来と考へて行はれハ深山の石川
入るるに大なる洞はあり漁父即其中入り遂ハ仙境といふ
仙境とハ仙人居る所也又入子逢て三日還留して帰ハ人間界とハ己ハ三年の月
日を経て帰来しとあり
是後ハ云意ハ表中郎先生其吾をして真ハまことハ花と好
しめハ己ハ早く那花洞はの因に遊居る仙人とも為べきをいふ交後
またハ己ハ尚復何このこゝろ入間の塵土の人の間の塵土の塵土の中
は変り居て官人と為て居べき哉といふことあり是中郎自界下
と云文意なり

十一清賞

茗賞者上也譚賞者
次也酒賞者下也若
夫内酒越茶及一切
庸穢凡俗之語此花
神之深惡痛斥者寧
閉口拈坐勿遭花惱
可也

十一清賞

茗賞者上也譚賞者次也酒賞
者下也若夫内酒越茶及一切
庸穢凡俗之語此花神之深惡
痛斥者寧閉口拈坐勿遭花惱
可也

清賞とハ清ハきよ一賞ハもてあそぶと續これハ

挿花と云ふは樂むに似たりて清と好きとの分別あり凡そ清
賞す(き)夏也○若貴者上也とハ若ハ茶なり若と喫て花と
この一む者ハ上也とあり○禪賞者次也とハ禪ハ風雅なる松
禪とする事より挿花と賞観する事風流なる雅しき禪より樂を
中品より次也と云ふなり○酒賞者下也とハ酒ハさけり酒と飲ん
花とこのむ者ハ下品也好する事なり○若(支)内海越茶及一
切庸碌凡俗之徒此花神之深意痛斥者とハ内海とハ大内より
出る酒酒より撥酒ハ強き酒なり執茶ハ執地より出る茶より好す
番茶の事なり一切庸碌とハ庸ハ凡庸とて尋常者此の通例
の者といふ様ハおしきなりけがらなり善凡俗之徒とハ俗ことごと
刻をさしとする事なり○寧(平)江村空如遺(花)悩可也とハ寧
とハいつそといふが如く困むものといふは影て居る事なり松望とハ
林ハかれると澄かれ木の立ともさく子影て移れとて坐する姿
と云ふなり○是(去)意ハ花と賞し執(子)若を用ゆるハ上口也也
禪賞とて難き風流の徒とて此(め)樂む者ハ中品より次なり
酒と飲て賞する者ハ下品なり成(社)若と喫者ハ風雅とて
少も不風流ハ陥るすす酒と飲者ハ俗ハ風流ハ似て既(は)益(是)ハ

次(来)ハ不風流なりて幾(者)さまりて大(凡)俗と云ふもの故(に)風(賞)を
中(也)とす善(安)内(海)越(茶)の類(ハ)下(品)なりて大(飲)する凡(俗)者(の)事
み(て)清(供)み(入)へ(す)及(一)切(の)庸(碌)尋(常)考(の)機(者)く(様)なる凡(俗)
の(語)習(ハ)公(事)出(入)表(負)の(徒)或(ハ)查(利)利(の)禪(又)ハ(人)の(善)意(の)
尊(著)以(様)一(凡)俗(の)語(なり)左(様)の(事)ハ(花)神(之)深(意)痛(斥)
奇(者)なり(依)左(様)の(様)意(不)風(流)なる凡(俗)の(語)と(花)神(の)前
みて(去)人(なり)も(寧)いつ(そ)の(こと)口(と)困(る)影(て)林(木)の(類)は(松)望(して)
然(然)と(て)若(て)花(の)悩(は)遺(を)勿(ハ)あ(ら)ん(可)也(と)あり是(挿)
花(も)見(様)樂(極)か(意)々(れ)を(以)花(の)為(ハ)悩(なり)奇(て)花(と)挿(る)
ハ(ハ)熱(を)多(く)す(此)執(史)の(類)と(見)る(ハ)花(と)漁(人)と(て)其(茶)
本(の)出(生)は(質)と(出)一(或)ハ(使)令(を)子(を)て(其)花(の)生(質)意(態)を
露(す)今(茲)は(去)所(ハ)挿(花)と(観)る(入)子(を)て(其)挿(方)の(類)と(云)され
バ(こそ)茶(本)ハ(清)情(なる)もの(なり)其(花)の(性)は(徳)て(執)申(一)移(の)法(は)
行(義)と(観)て(上)品(は)挿(へ)き(事)なり(然)と(凡)俗(の)意(は)僅(く)茶(本)の
性質(も)考(す)無(理)なる(態)は(鏡)出(色)と(つ)け(て)幾(者)下(品)
は(挿)て(あ)ら(上)花(も)挿(殺)者(あり)此(花)神(之)深(意)痛(斥)者(あり)
是(以)凡(俗)の(度)より(因)雅(の)道(と)知(さ)る(者)の(所)作(なり)是(技)藝(の)

肝要なる所子一々此章別て意と止べき度かり悉く挿花園會子出
夫賞花有地有時不
得其時而漫然命客
皆為唐突

夫賞花有地有時不得其時而
漫然命客皆為唐突

更賞花有地有時とハ賞花とハ花と挿て眺め樂む事とリハ
有地とハ挿花と置キ其壘所中りと云事ありこれハ譬ハ此邦又
今挿花を數種挿ちて樂む事有り會と云聊候あり
今別種於堂中挿花増之花寄其素久矣蓋宋時始花史云
宋南唐後魏各日以大金瓶插過挿花不獨瓶子繞殿園是
惟後家殿堂之佳麗非隱逸素雅之趣也これハ雅趣ハハ
おとされども花寄の發起も亦一今專花寄と云數種挿ち
て樂む事あり其時ハ瓶の壘所其花の形態よりいませ
の器分別固る譬ハ床前床脇袋棚下隅半坐等と其花
の態より又花寄り瓶器縁て壘所と依定る事あり是
を今席態の趣向と云るといへ一坐一席の連綿の佳趣を
趣向す譬ハ大なる花の次ハ次き花寄り瓶の次ハ依きうつ

紅花の勝チ、名き花或ハ愛花又入と名者あれハ出と居者あり攻身不固子
一ノ等是前子去置瓶忌兩對忌一律忌或行列又枝葉相寄紅白
相配省曹下樹墓門華表也とありて是花の齊整すると齊整せざる
どの各別より花之所謂齊整ハ參差不論意態天然といふ是花一瓶
の形態耳子あらず一席の連綿も此意趣を多々了凡而席上一坐の
連綿の美意の事ハ萬道皆同事也是風雅之道の身一なり因而瓶
の置所より其場所ハ應すキ挿態あり又挿ち花の出来子よりて
其態子應すキ置所あり是と即有地と云なり總而此瓶史中ハ鏡
所と挿ち明朝も其頃挿花流行して同好者集會て花と挿ち
媛一と思へり今此邦も入て集會て花と挿ちる趣ハ愛る事あり
は有時とハ其時節とハ交花と挿ちるハ其趣合ハ朋友五七人集會て
花と挿ちて娛むハ其時節の善悪あり譬ハ和朝も今持茶とする
人朝茶正午飯後夜話等々其時と通而約するこゝに花子も其應
時節あり又もの子寄の序ありて譬ハ同好の朋友亦集て花と挿ちて
其寄へき時あり上巳日七夕日或ハ何夏の祭後夜宮等と可應の態
時節を得て瓶花と並樂へき時節あり是と時節と云あり
亦花も時ありて其時節をさるものを用す譬ハ水仙の花ハ八月下旬

咲と雖是其時を離す水仙ハ冬の者にて十月末月頃と時節とする
 かり又移ハ早春の者あると冬十月頃末花のめぐもせぬ枝と室に入
 多麗子花うせ挿花とする凡而移子限らず速翹さんゆゆの歌皆初
 冬より室に入る花と咲せ既ふ甚凡俗の事ありて挿花の賞既とハハ
 へうは是ハ此邦をりてハ奇 中華もても初冬移の末花なき枝と
 室に入る花開せ強て早移と名て長安市中子賣一といふ事あり是皆
 凡俗の所作ありて雅士の為度は非ずされハ此瓶史の序文もハ雅瓶
 野花隨時挿花とあり又身一章花目ハ入喜為移為海棠棠冬ハ
 為蠟梅と又九章使令も皆好姿態各盛一時とありて風雅と一き
 者ハ斯のこそ 時をさる者ハ不好亦移花といハ其時節ハ盛の花の
 中より其彩ともぬけ極上品ある者と挿き花と上花ともいふなり然る
 冬の中ハ木蓮花或ハ藤花の數と室に入る花用す事是ハ造り
 花にて正しき花とハ去々ハ其怪敷者なり是等と挿花と心得るハ
 拙き意ありすや其挿花ハ其時節感りの者の中より極上花と推
 ち粗末ハ挿て精氣うるりきとこそ 眺めとも媛ごもして賞既す
 べけれ又亥の饗宴とともあるべき事あり是とこそ 風雅とも去べけれ
 さらと未時節も亦ハ去々ハ其季の違る花と室に入る無埋さきせ精

氣も無く去々ハ怪くして懸るに情なき花と挿て何の眺とも媛
 ともあるべきや或ハ又嵐暴は遇時候の不順の氣は遣て咲とこそい
 花出生一そこい 花などの支難者と挿花とてもてさす是ハ木具
 あるものより挿花ハあるべし別而雅者に皆凡俗の事なり燕子
 花などハ四季共ハ有者されども十月頃挿て試るに何となく如奴又ハ
 逢る心地して屋一が媛一がさるり ○不得其時而漫然
 命客皆為唐突とハ漫然とハさるり外より来る人と客といふ命とハ万
 といふごとく 命客とハ客ハさるり外より来る人と客といふ命とハ万
 ものとおすある事あり其客は向いて斯きされよあぐ去々ハ愉す
 ある事を客は命といふなり皆為唐突とハ突ハつくとお字より忽爾
 思寄さる所ハ突出すの義あり 俗言ハ數々挿と突出すといふハあり
 是前子去ぬく時ありき俗花と挿て客は命ときハ譬ハ冬の月木蓮
 花辛夷藤花の數又十月頃燕子花等漫然ハ挿てハ去々ハ奴人
 逢る挿てハ眺も面名ともさきものなり是と皆為唐突といふてつき
 ともなく教う挿と出る挿る心もちといふ変なり又同好の朋友が寄
 花と挿て前子去ぬくついでさき時を約して寄集事あり然ると
 其時を得すして漫然子よせ集てそれ花を挿とさる是を見とさる

樂多といふは唐突とて教を擧げしるは興も樂も有べしは是前より趣向に去者と決定て棄てざるついでより時と宿むいふ名へき事あり

○明朝と本朝とハ其違ありて中身ハ家のうち床と張は疊と云り床の間といふも一箇敷瓦一一切の物を置き床の上は並置あり此を元と云卓と云挿花も此凡のし子置事あり是ハ家の内限以外も庭も或ハ山亭とて亭坐敷等も此几卓と持行て挿花其外合敷等も此上子垂て暖む事なり是前より去置欄之漆卓とて縁に挿花と附も卓あり又懸幅あも壁に掛け或ハ外も樹の枝等も懸て風除あもする趣あり或ハ風体といふものありて風はひつぎ鳥の休ぬ様もする者ありされハ此来は花と賞する去地と時節と書列り其趣と観るに挿花の事より非ず種樹遊花の種子と魚と趣あると皆右より去めく時は去りてハ外も花と挿てそのむこと其云地の風体む可也といふべきなり

寒花宜初雪宜雪霽
宜新月宜煖房温花

寒花宜初雪宜雪霽宜新月宜
煖房温花宜晴日宜輕寒宜華

宜晴日宜輕寒宜華
堂暑花宜雨後宜快
風宜佳木陰宜竹下
宜水閣凉花宜爽月
宜夕陽宜空階宜苔
徑宜古藤巉石邊

煖房温花宜晴日宜輕寒宜華
堂暑花宜雨後宜快風宜佳木
陰宜竹下宜水閣凉花宜爽月
宜夕陽宜空階宜苔徑宜古藤
巉石邊

寒花宜初雪宜雪霽

宜新月宜煖房とハ寒花とハ冬用く花の夏あり宜初雪と云るゆき乃除日等宜といふ事あり宜雪霽とハ暑ハを去ると去字宜の傳てそれる時宜とあり宜新月とハ新月ハ宵月のことなり宜煖房とハ煖をあらうすることなり宜小坐敷あり是ハ煖ある小坐浦といふ事あり○爰に止せる時節と見ると前より去めく趣向のむらうより因好者寄合へき時節と去り譬ハ初雪等のちりりと捨去りたるは持作する人ハ持家へ會り教人ハ連教師の持し行き俳諧師ハ宗匠の老と尋向る茶人ハ室をうけて友人と待是人情の妙と云むるを今因

くら漢亦愛ことか。云ハ瓶花と賞の輩も物置の是奉りて。同好
 の朋友五七人寄来て雪中の挿花の娛ま。風俗にて面白き事。在
 此是前より趣向と立るの序より時をあるべし。凡而茲に出せる時を
 皆往考て味ひしべし。○温花宜晴日宜軽。宜華堂とハ温花
 ハ春の花とハ宜晴日とハ晴る日。宜とハ長閑。宜とハ興ある日。宜
 宜軽宜とハ餘寒次第。宜とハ暖等と僅す。了ゆといふ宜華堂とハ
 是ハ寄麗と立流る空敷の事なり。是春のころあらふべし。○
 星花ハ宜雨後宜快風宜佳木陰宜竹下宜水閣とハ星花ハ夏
 の花あり宜雨後とハ雨等の一雨晴後。せつとハ同好華来
 て雅潭趣向催のよきはいである。宜快風とハ快風ハ快き風なり
 夏の空敷のさすかに花障徑におく。微風の吹く時なり。宜佳木
 陰とハ佳木よきと云事。勝て餘き夏なり。木ハ木なり。大木なり。蔭ハ木
 あり。ひひの夏なり。是ハ勝て佳木の大木の蔭と云夏なり。前より
 家内より敷瓦にて萬物皆卓上。置夏は佳木の大木の蔭。夏の午時過
 より席を設て水草等挿列する。素色又娛くす。宜竹下とハ竹下ハ
 竹下あり。宜水閣とハ水閣ハ池の上川の邊。一陰出る亭。空敷等なり。
 皆是夏の趣。子應ものす。てを其宜と得ると云へきなり。

涼花宜爽月宜夕陽宜空。宜若徑宜古藤。曉石暹とハ涼花ハ秋
 の花なり。宜爽月とハ爽ハさわやかに。涼月夜と云夏なり。是前より
 清人秋涼其友と携て月を寄。雪子遊きて花と賞者。如何に同好乃
 友を誘て午時頃より席を設て。瓶花を挿て月を俟。是風流雅趣。了
 あすや即趣向の宜はいでと云。宜夕陽とハ夕陽ハ日暮あり。さきさき
 秋の夕涼。寐莫子困居。孤空の愁ハ堪なく。秋猶の思と古人も亦也
 斯る竹柄同好の知己。莫逆の朋友。弟来て趣向。お人ハ独娛。あるべし。
 宜空階とハ空階打ひける階あり。宜若徑とハ若徑ハ竹徑ハこと
 ちと云字。又徑意の大道。是非ざる通ひ。若と云。若徑意の大道ハ草と
 無き。後ハ掃除して立流され。徑ハ自草生。茂若。若と云。若色。今
 本邦茶庭のあま屋。通海次待合等の有候と云。○宜古藤
 曉石暹とハ古藤ハ古きふところ。曉石ハさうと。高き石。暹ハわり。其暹也。
 秋ハ秋。夢と云。隠ふる。故ハ皆。隠。逸。素雅の趣。別。而。其。序。宜。なり。
 ○瓶花と賞。瓶花。事。粗。て。以。常。と。華。并。む。於。て。ハ。何。時。と。定。む。時。ハ。ある
 づら。何。處。と。ある。も。定。め。づ。ら。何。處。も。諸。の。好。事。より。同。好。の。者。と。俱。り
 一。む。れ。と。携。て。賞。す。も。亦。バ。更。ほ。い。く。宜。時。節。と。約。て。其。場。所。並。野。等。和
 禪。して。瓶。花。の。一。律。を。行。列。さ。す。と。齊。整。する。趣。向。と。立。

上花子ても其無風流なる凡修人の手子羅て集き瓶器子挿らまて或ハ其地
 不相属亦多挿之して右勝手の床間子左勝手子挿之り或ハ懸幅の畫子
 相属せ給又ハ大器の器子小器子挿之り花器子負之り或ハ又瓶器の形状
 子因之る花の挿之移之移らぬとの澤や瓶器をも辨之ず漫然花の挿之り
 意と入る漫然とて大儀なる挿姿等皆花と集集す是則花挿姿
 散後して子逐不相属是なりも亦た其好意後儀中等の婢女と為
 て終は鼻線凡俗者の室房に入らぬ可指之
 今此瓶史中は必所の儀者凡修人とて此挿花の本道の道理とを以て
 技術の下なる人と指之ぬなり警位上人なりとも又万子のき入りとも
 此道の本及と知され此道は於て凡修なり振令下儀の老子も此本道を
 明甚て技術の能事堪能の者と風雅人も好意の修人も去べし是此瓶
 史挿花の技藝の大匠あり今此本道と明甚とあり此其人と擇
 其技術と學びてまふべし後能事とあり此本文と感ずべし
 ○右此述習所の趣意國字と通修子書とりとも意味深き所ハ
 此道上手堪能の者ありてハ分別つらば進も未熟の初心の老子ハ
 流及ぶべき事あり徳而此瓶史中の注する所悉皆風味深長
 ありがゆに子得と熟讀して修し勉む後既子能事名人堪能の境

至らハ其時此意の深き意と知て大子感すべし其とも中郎先生の
 風流雅趣勝ある哉妙なる哉

瓶史國字解卷之三

瓶史國字解卷之四

陳雲齋 桐谷鳥習 註解

十二監戒

宋張功甫梅品語極有致余讀而賞之擬作數條揭於瓶花齋中

宋張功甫梅品語極有致余讀而賞之擬作數條揭於瓶花齋中

監戒とハ監ハかんがふこと云
字戒ハいまゆると云字是ハ花の快意よめておまると厚しめられ哀む事有
去るら致子羨子監戒と云一之と條用とするとおまなり
○宋張功甫梅品語極有致とハ宋の並に張功甫と云人梅品と云書物
と作出さう梅花の雅趣とを別く高く花の度を書くる書物なり其

梅品の活極有致と、甚雅趣有て取用子乏りと云夏あり。○余讀而賞之と、余ハおきなり中亦自其書物讀し甚佳きとて賞し不めり夏なり擬作數條掲於瓶花齋中とハ擬作とハ擬ハおそくると創作ハつくはと云字なり數條ハ教條の條目書と云夏あり瓶花齋中とハ花と持そて瓶ハ一向の中と云夏也掲ハおくる創す其條目書と花と挿る座敷の中舞等子張出ー置て帯子忘却せざるなり此邦諸古所著の法度書の類あり是ハ表中郎先生余張功甫が作る梅品と云書物と讀て見も處に其法極く甚佳き故有て之と云貴美ー此梅品子擬へて教條の條目を作く瓶花と置く齋中の壁子張出ー掲壺とあり其條目ハ

花快意凡十四條明窓淨室古鼎宋硯松濤溪聲主人好事能詩門僧解烹茶薊州人送酒坐客工畫花亦盛開快心友臨門

花快意凡十四條明窓淨室古鼎宋硯松濤溪聲主人好事能詩門僧解烹茶薊州人送酒坐客工畫花亦盛開快心友臨門

手抄藝花書夜深鑪鳴妻妾校花故實

手抄藝花書夜深鑪鳴妻妾校花故實

花快意凡十四條とハ即中郎先生梅品の語

中郎先生梅品の語擬て作所の條目なり花快意とハ花の爲に云々事と集り十四條同條は先云夏あり

○明窓 わきりたる窓といふ夏あり、あり窓の許等々花と置し宜かり總て挿花の室敷ハあるきと佳し是亦一條あり

○淨室 淨ハ清淨の淨の字ヲ法ク潔キ事室ハいふなり小坐敷あり是淨く奇麗なる小坐敷と云夏あり是亦二條あり是ハ今此邦よく花と挿る室敷又茶湯等す係一向ナモ先身一掃除と云入るなり凡而挿花

ハ其室敷の中ハ勿論庭浴池等子亦在る也必も塵埃の無様子淨奇麗子掃除すき夏あり花と挿し佳し花と置し佳し又ハ壺の下或ハ器水中

○古鼎 古ハふるき鼎ハかぶるなり是古物の鼎と云夏あり亦三條也

○宋硯 硯ハすりすり石ハ穿の代の硯と云事なり

○松濤 濤ハ大波あり松濤とハ松風の響濤の音ハ云々云事五條也

○溪聲 溪ハ多クと云字是ハ溪の流の水音ナリ凡而松風の響細溪川の水音皆森密なる中ニ心身と澄一瓶花の雅趣ヲ合シて甚佳とのあり花の爲子もよめたりあるなり一才六條ナリ

○主又好事能詩ハ花と挿る席の主人ハ好夏の風流人ナリ詩と上ナリ能ると云ナリ是才七條ナリ是ハ今此邦にも挿花の爲子他一招れ或ハ亦同好者寄會て花と挿ニ之娛ヲ致有て他家とナリ惟す時は其家の主人ハ不風流の俗物ナリ挿花の見様も知れ凡俗なる理宏潭等一々雅趣ヲ應されハ甚心勞ありて自娛一々以極又其主又花ハ挿おとも一俣ある好事者ナリ詩と紙り或ハ秋と取一て俱々好古の雅潭等亦ハ一入席上ニ面々興ありて樂ニ保々人ナリ

○門僧解意茶ハ門僧ハ中郎先生の門ニ志々々注進する俗ナリ茶と云ることを解すとハ能合點して居ると云意ナリ此俗茶の煎法と能く合點して上ナリ也と云事ナリ是才八條ナリ是ハ上品茶と能き加減ハ煮る夏ハ甚六ヶ敷ものナリ別ハ中華ナリ茶と云る事の斟酌あり六ヶ敷度ナリ然ると中郎先生儒學の門人何社も有へられと花を挿る時茶と書夏ハ俣て久ハ面々以極ニ至る態あるところやすき俣こそや雅佳なり故子つ俣と云せり是風流の極意感味餘情保とのナリ

○薊州入送酒とハ薊州ハ地名あり是ハ酒と造り出す所即此邦の池田丹の穀あり其薊州の人花席ハ折能酒と送取一ナリ是才九條ナリ

○坐客工畫とハ花の坐る客ハ風流人ナリ画と能工人ナリと云意これ亦十條の目ナリ

○花亦盛拜 快心友信門とハ花亦ハ前ニ注る如く諸才諸才の總名ナリ凡而の本草の花と云夏快心友とハ心の合て懇子する友達ののり也信門とハ其意進の友訪来て音信ナリ是ハ挿置る花亦の今と感再敷く時は其心の能合する友々門ニ迄来るも云事ナリ人情ハ唐日本も一般よく今此邦よく花と挿る時ハ以て花姿態整ふるもこれ一又見弄人も亦意取一と思小所ハ亦や亦に無風流なる俗人入りて挿花子ハ眼もや以理屈潭等と一々亦けくハ挿花等甚小技ナリ今々無用の物ありあると云すは輩もあり大ニ雅心と云小事をとあり然と甚愛折能心合も友達の考も同好の術者ハ花術も上名ある人ナリ俱く日花と眺め巧拙を論しつて雅潭時と移すこと美々興酬て娛と芝草是花亦或ハ周時快心友門ニ迄むといへり亦十一條ナリ

○手抄藝花書とハ抄ハ抜粹と訓字ナリ抜粹とすは夏ありこれハ主人手花と藝る法と書くも書物と抜粹とすりと云夏あり十二條也

○夜保鑑場とハ鏡ハ匣と入る器あり日本に鑑子等の類とハあり
 是ハ花と眺め夜と更一深文子とて與も稍盡かんとす厚頃深等出え
 と鑑の場する等類を益繁と持出る有極破與と引込く面公體
 夏より是彩十三條の目あり是も此邦の的する夏あり同好者或
 五三人寄會りて瓶花と娛む子既子親更更といふき長煙火も後海火煙
 の火より消滅て甚吸き火も至れハ殊文字寒さハ殊勝手も好女も以
 引込く風流なる夏あり人
 ○妻妾校花收美とハ女房あり女房あり女房あり女房あり
 校ハ人加るると女字よりもの考へ合ると女房あり是ハ瓶花と娛む處へ
 ありやあ等出てり花と樂まて此花ハ面公一是ハ何極ありて其花
 のぬ美と校合風流の儂をす家事なり是亦此邦の的する夏あり何
 少て女子ともハ挿花や待會休以等ハ好まぬものあり火批ハ津瑠璃三珠
 等の類も思ひは故に同好の心易き客来りても兎角勝手方ハ心配
 興も存さるるなり然と妻妾出るとも花と娛む收美と校する等
 真ハ風流あり客方も心配解て心配せはひとほ興ある事あり
 是の事も亦深く人歎是彩十四條の目あり

花折辱凡二十三條
 主人頻拜客俗子闌
 入蟠枝庸僧談禪牕
 下狗聞蓮子衡術歌
 童弋陽腔醜女折戴
 論附選強作憐愛應
 酬詩債未了盛閑家
 人催算帳檢韻府押
 字破書狼藉福建牙
 人吳中贗画鼠矢蝸
 涎僮僕偃蹇令初行
 酒盡與酒館為隣案
 上有黃金白雪中原
 紫氣等語蕩俗尤競

花折辱凡二十三條主人頻拜
 客俗子闌入蟠枝庸僧談禪牕
 下狗聞蓮子衡術歌童弋陽腔
 醜女折戴論附選強作憐愛應
 酬詩債未了盛閑家人催算帳
 檢韻府押字破書狼藉福建牙
 人吳中贗画鼠矢蝸涎僮僕偃
 蹇令初行酒盡與酒館為隣案
 上有黃金白雪中原紫氣等語
 蕩俗尤競

既賞每一花開緋縹

雲集

雲集

字辱をうめると譯是ハ花を折辱めらるる事と也と條用は出らるると云々
凡二十三箇條あり

○主人類群とハ其花と挿る席の主人ハ何物も富貴ある客がき
くまハ阿波面後より頻々群集一貴ハ尊崇る事甚だ有様と云々
挿花の辱らうと云物も一嬌の事なり 亦一條あり

○後子園入蟠枝と後子ハ凡俗人乃事なり 蟠枝ハ蟠ハくま
と云字枝ハくまと云字あり 蟠り出りくまと云意より直ち奴事也
園入ハ園入まき處へ移さ入る事なり 是ハ凡俗の輩花の本道乃
趣と合照せしむ彼蟠出くわる花一枝の花と雅趣と心清齊整なる

雅正の花の中へ園入く移入る事と戒めらるる事ニ一條あり
○腐僧淫禪とハこれハ腐ハ凡庸とて尋常の者の事なり 俗ハ出家
沙門の我其庸のやく俗僧ハ花席に於て禪理等と談するも云々
是亦甚雅趣と云々大子花神と辱らむると云々あり 亦二條あり

○惚下狗聞とハ惚ハ迷なり 狗ハこの事なり 惚の下は狗の聞と云々也
是擧ぎき夏されとも甚暴暴狂風象ある者なり 亦一條あり

○蓮子棚榭教量とハ棚榭ハ巷と云夏なり 胡同友即巷なり 教量ハ
此邦のかけま野郎の歌なり 蓮子巷ハ甚俗なる者也 亦五條
○弋陽腔とハ弋陽ハ地名なり 腔ハうまい事なり 是ハ弋陽と云夏
人の謡流行なり 日本にてハ 潮来節越後神供節等といふ野也
これ亦六條あり

○醜女折戴とハ醜ハ三つと訓字よりこれ容儀甚き醜き女と云夏なり
其醜女が花と折て折らるる事なり 是亦七條あり

○海所選とハ所ハのほると云字選ハうらむと訓字より官職位階の昇
遷の義即立身出世の事也 花席に於て青雲の禪雅趣は非ず甚
不風流なり 花と辱らむる事ハ八條あり

○強作隣愛とハ隣ハわかれむといふ事なり 割愛もわいするもそれ即
是入と交接とするハ外面斗ふんせいの様子取成内心中ハ不實の事
して親切の心なく表むきむらりの軽薄なり 是と強作隣愛とするも
云々なり 箇條の八ハ徳而世中ハも嫌ハ事なり 別而花席雅正の堂
ハ甚嬌ハあり 是亦九條あり

○應酬侍債味とハ應酬侍ハ侍とハ侍と入子寄て紙る時先の入り

○和と作て増又此方より押返て再和と作て増又先の入りより再和と作て増如是五度十度より五より法来し互に取遣と為事と世と應酬の詩と云なり續ハ云々を刻て元並貨と催思すと云意の字なり詩債とほききハ其並貨の核は後集の詩に借出きて其債か来ると云変なり其應酬と云是晚唐の頃より稍始りて宋元の間ハ天子盛なり明の五言ハも残りてありあり是ハ甚依あることとて無風流なる事也是事十條なり

○盛閑家ハ催算帳とハ花の盛に用く時家ハ算用の帳と吟味するを算を主人に催算する事あり是十一條なり此花の盛に用時とあるハ花と押盛る家中娯樂の酬と云是なり其時算用帳等持出すハ大雅雅と消し與と失ふ是なり酪乳無風雅なる是なり

○檢韻府押字とハ韻府ハ詩と作る爲に韻字と集る書物あり檢るとハさるると澤く食法する事なり押字とハ韻字と撰りて其韻府の詩と作る時入用の韻字條出す澤なり然に花席等も其韻府の書物と撰りて韻字と押す是甚依なり無風雅なり十二條なり

○破書指藉とハ根ハさるると漢字藉もさるると澤する字なり是ハ破書とハ古書物ありの是其書物指藉とさるると取散置る程もさるると是亦教風系無風雅なり十三條なり

○福建牙入とハ福建ハ地名あり船津え番客多く群る楚夏の地也牙入ハすおハと云事なり高貴船同在る財物と揚る時又同産より船に積波時舟中より是法より保護と得て著す者なり日本の中實小揚等の類なり是十四條なり

○吳中賈画とハ吳中ハ吳國の事なり賈ハおせと讀字賈物偽物也なり吳國ハ賈画を存出す處又名代ハありて居る所なり依而吳中の畫畫と書しなり是ハ偽物等何種表結構ハ名有故人の画等懸ありて賈物もハ甚依るなり主人の心成思はれて恥辱しき莫かり是事十五條なり

○鼠矢とハ鼠ハねすことなり矢ハ糞なり總而鼠糞ハ毒物なり金物也何事も腐るなり其のなり水に入ると花も枯す鼠屎も毒ありて瓶罈等も穢てハ色變りて元は復す也子蟻也牙十六條なり

○蝎蝮とハ蝎ハ蝮牛なりかばらりの事なり後まのくはらりとては蝎蝮のなりハ口より出る津液なり是ハ彼蝎蝮ハ口より涎を出して遠歩る痕がく光り洗てハ容易ハ去す甚息苦救者なり及て瓶罈等ハ破る事と忘むなり是十七條なり

○僮僕優蹇とハ僮僕ハ僮ハ臯一と澤僕ハ下部石仕者の蹇あり
優蹇とハ左傳の文字より足と踏波て歩行せんさいなる蹇あり是ハ
彼僮僕の優蹇者より立歩行て主人の意と成ると云々也十八條
○令初行 函盡とハ令ハ此邦より報令ハ口會滑緒等と云々酒之行
飲する氣味のことあり酒令と云々其仕後等書著する書物等も
ありて大分巧拙のあり蹇あり其函令の初る也い酒盡て仕蹇也
是其本與なる蹇あり是十九條あり

○與函館為隣とハ函彼ハ前子十一章清賞云岐舎函彼中の趣
ましく居函在者賣函屋の事あり為隣とハ隣ハ隣あり左傳の臯
賣賣函屋等と隣合て花と挿るハ此方の佳美人と俗者より交する
意より花と挿る也と云々也是二十條あり

○葉上有黃金白雪中原紫氣等語とハ此葉を空に空中原紫
葉等の語よりハ明季干諾と云々又又王元氣と云々其頃の學
あり其頃七才子とて學者の名高きもの七人有りる其中の二人也
此干諾元氣と此輩の詩の白浦子且女用る語あり○海内黃金
見意氣○人間白雪者文章○中原紫氣返江東等と云々あり
是其頃の詩句なり然る表中郎ハ晚明人一人一派の學問と云々

天下人と藤くも者あり故子干諾元氣等々風の學問と藤くも乃
詩文集ハ本用なり目而自謂曰天下之人遺干諾毒云々二十一條也

○並作花鏡觀賞とハ並作とハ並ハ此京あり前子も恒くは此京ハ
藤京稱す故子並作傳と云々並作と云々藤京の俗風俗輕薄
ありて花と挿る等競て賞玩するあり人情何國も一般あり今日在
てても江戸等の繁華の地ハすハ挿るの會とあれば凡俗の輩何の
多く人と挿る等競て見物す大都繁華の地大概挿る物見挿る也
是ハ却て花と挿る也と云々是二十二條あり

○每一花并挿雲集とハ挿るハおろき夏候ハ多くあり赤き
幕あり每一花并挿と花の盛り玉る夜毎と云々是ハ一並挿て盛
りある夜と云々挿る等と雲の如くは張集ると云々也より前條同様
凡俗の人情と云々是二十三條あり

以余觀之辱花者多悦花者少
虚心檢點吾輩亦時有犯者特
書一通坐右以自監戒焉

以余觀之辱花者多
悦花者少虚心檢點吾
輩亦時有犯者特書
一通坐右以自監戒焉

以余觀之とハ余ハ吾とノ事マテ余と以て之と觀ればとノ事ナリ
○辱花者多悦花者少 ○虚心控點 吾輩亦時有犯者とハ虚
心とハ我心と云くして他人の心はありて吾が身上と見ると去夏有犯者と上より
後ハ人がると漬點ハきんとするに去意時とハときと去夏有犯者と上より
折辱二十三條の罪と犯者有破る者有とノ事

○これ去意ハ前より二十三條の趣と余と心之と觀てハ世の中のもの者ども花
と辱むる者多く花と悦むる者少くまれあり吾が心の不簡と雜ま
心と雲して他人の心より後點て吟味して觀れば吾輩も亦時々こ
二十三條の罪と犯者ありとノ事あり

右此花之折辱二十三條の趣と觀るに皆世中の人の行状の急しき
偏僻なる事と述列し凡而風雅の道ハ雅ハくしきと漢字マ其心
正統ニ直なるを風雅と云ふ詩ハ勿論教訓茶湯等ニ至るまで
平常の行状雅しく人道正直にして妄まざるを風雅の道とする

ありさて挿花の道ハ心の正直なると身一に天地造物者の作
草木自參差して倫くは意態を然ある夏人面の不同こそ一花も
亦其如く枝枝或ハ百枝集ても同一きものハ一燕子花馬身茶をハ
同一種よりゆれども其葉の生質の癖ありて態形自異て因ハあり

されハ花と挿者其本の態と其葉の質は效て挿時ハ百種百挿同態を
然も各齊整者あり然と云は挿る花姿は其通は挿人と思ひ又他の
挿る花態は其如く挿人と念ハ大なる誤なり是と則凡俗と云

因面表中郎瓶花の詩も一枝兩枝正三枝四枝斜宜直不宜也
閑清不圖奢とわり又先師常謂く挿花ハ惟直なるを好む其草木
生質の甚おハ即其甚は後て挿るべき心と草木の質は後て挿る事

ありて我が心は草木と後人とハ思へくは是風雅の極意と人問の
交接も亦如斯く我正直して他の氣を後て変れハ觀るべきハあり
則風流の通と云へば元來我が心の不直より人の交も速くあると思

草木と人とはくして花と挿る事此理は等し此等の深意能明貴人
挿花齊整の事を得るは惟是花の居りと一統のたさまりとの趣
ハ是ハ初心の輩に知れなき所なり此趣と能く自傳して其本態其

葉癖は後りて挿る時ハ用物と百種挿ても同一形態ハ有べきは是と真
の齊整と云ふ今世上花と上よりこふすと云へば己が心傳は折るき挿る
桃も葉も水仙も百種皆同形態に挿て其姿屈曲して小品果依の有
種と媛しむハ則是花の折辱する花と賞するハ大に違り其心我信邪を
よハ齊整と態と得人事秘し萬物好きハ少く悉きハ多き也

此邦是古花と尊華而己多し其花の象質子後挿成し花と悦し
 動る者ハ少也今吾も亦吾が心と他人より退て観る時ハ我風意の華子
 色時花と辱しむる挿しと為老多し其花の性情と悦しむる挿し挿成
 者ハ一圖角子二十三條の戒と犯さる挿しはさきもあり
 ○特書一通坐右以自監戒焉とハ特子ハびりと去字ハ己獨と去也
 一通ハ首尾合き一通の書と去夏坐右ハ其花と挿し坐敷の内と去夏書とハ
 即此條目と認て張出すと去夏以自とハ自分よりと去夏又去字前より
 去夏より監戒ハ監ハかんがふ戒ハしむと去字又異竟此意ハ特右の條目
 と書して花と挿し坐敷の坐右ハ張出す自先手前より戒の監して
 其趣と能獲と去事あり

瓶史國字解卷之四終 大尾

瓶史海客跋



此有文具如陸並を三人猶指鼻鼻
 軍。横梨地詩。則未之。以爲。在平
 三。祥。如。瓶。毛。小。伎。風。係。餘。玩。也。唯
 承。平。の。久。甲。は。無。虞。梨。丞。六。富。座。瓶
 案。枝。腹。と。作。一。可。以。爲。け。了。矣。世。之
 風。養。之。器。四。郊。今。量。明。士。女。皆
 暇。爲。入。玩。手。予。故。之。瓶。花。者。云。二。以

長平之祥也。若平之未也。也。德也。
 富与市之。曰。傾。海。為。表。通。若。補。
 矣。以。傳。干。世。日。未。之。り。實。宗。士。民。
 多。收。此。伎。若。朕。け。玩。也。是。最。生。
 出。初。域。風。未。儀。也。予。与。之。
 六。之。又。于。悦。見。之。吟。呼。也。我。
 多。在。七。年。一。及。五。五。率。在。士。甲。

萬別後



